



2025年10月11日 第2課



恵みに  
驚く



信仰によって、娼婦ラハブは、  
様子を探りに来た者たちを  
穏やかに迎え入れたために、  
不従順な者たちと一緒に  
殺されなくて済みました。



(ヘブライ人への手紙11：31)  
新共同訳聖書



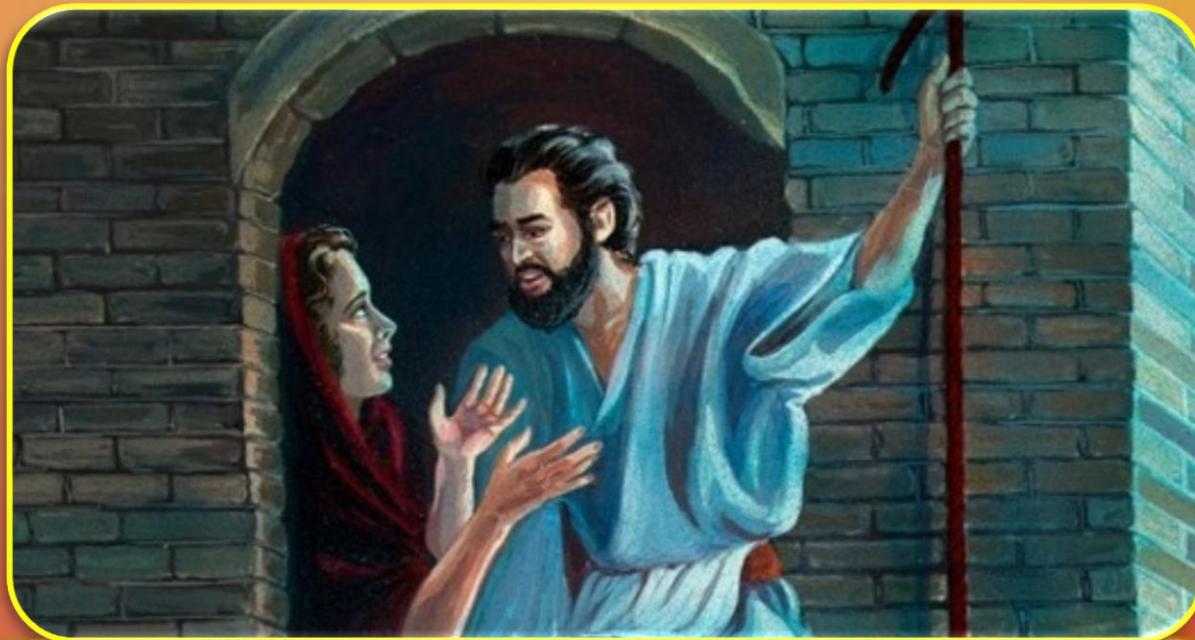
信仰によって、遊女ラハブは、  
探りにきた者たちを  
おだやかに迎えたので、  
不従順な者どもと一緒に  
滅びることはなかった。



(ヘブル人への手紙11：31)  
口語訳聖書

カナン人は恵みの限界を越えていました。そのため、イスラエルへの命令は「行って彼らを皆殺しにし、彼らの財産を奪え」というものでした。

しかし、カナンには依然としてその境界を越えなかった人々がありました。神が彼らに与えようとした恵みを受け入れる意志を持った人々は皆、滅びから救われました。



◆ イスラエルの人々への恵み（ヨシュア2:1、22-24）

→ 二度目の機会

◆ ラハブへの恵み（ヨシュア 2:2-21）:

→ 意外な場所の価値

→ 新たな忠誠

◆ ギブオン人への恵み（ヨシュア 9章）:

→ 相反する価値観

→ 驚くべき恵み

# イスラエルの 人々への恵み

(ヨシュア記2:1, 22-24)



# 二度目の機会

ヌンの子ヨシュアは二人の斥候をシティムからひそかに送り出し、「行って、エリコとその周辺を探れ」と命じた。  
(ヨシュア記 2:1a)

モーセが（カデシュ・バルネアで）カナン地方を視察するために斥候を派遣したとき、人々が入ることを拒否しました。40年後、新たな斥候が派遣されましたが、結果は異なりました。

## スパイを送る

公に (12人のスパイ)

密かに (2人のスパイ)

## スパイの活動期間

40 日間の調査期間

3日間の潜伏期間

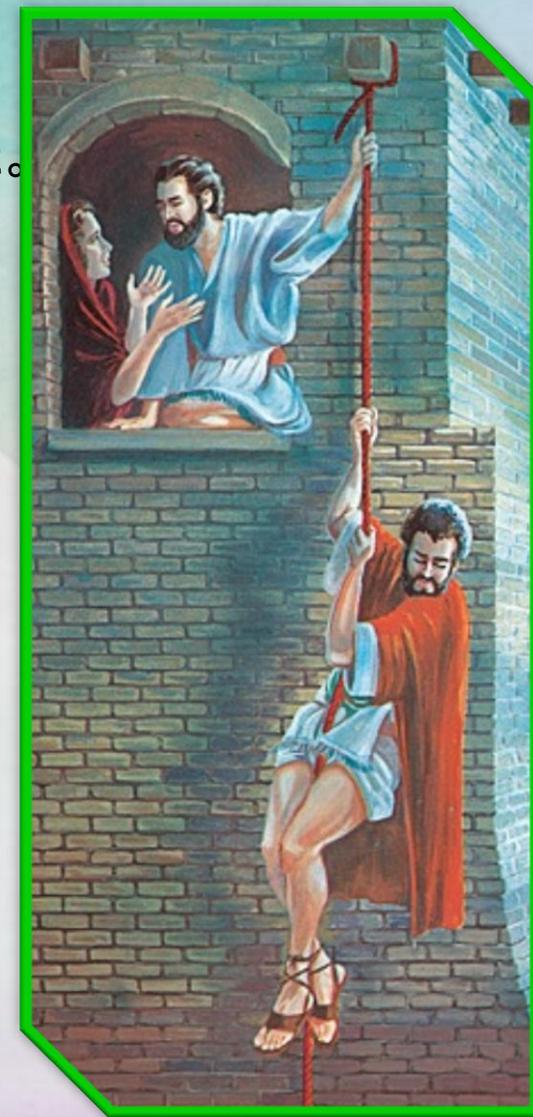
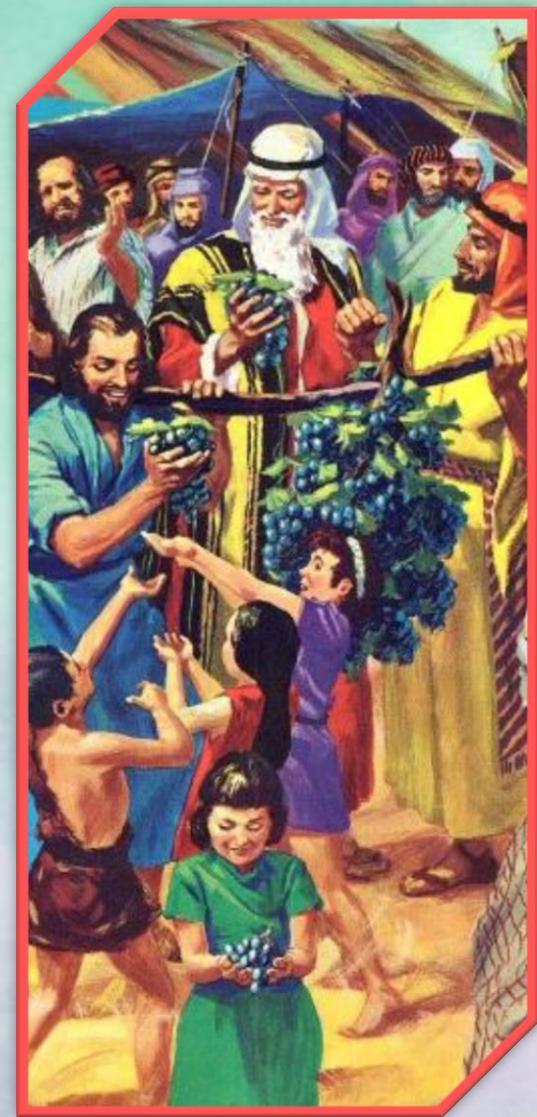
## スパイの報告

彼らは人々を混乱させた

彼らはヨシュアを励ました

新しい世代のイスラエル人もバラムの誘惑に惨めに失敗しましたが、神は彼らに2度目のチャンスを与えました  
(民 25:1-3、31:16、ヨシュ 2:1)。

今回はブドウの房も、土地の果実もありませんでした。ただ、イスラエルに約束の地を手に入れる勇気を与えた、ラハブの信仰の物語だけがありました。

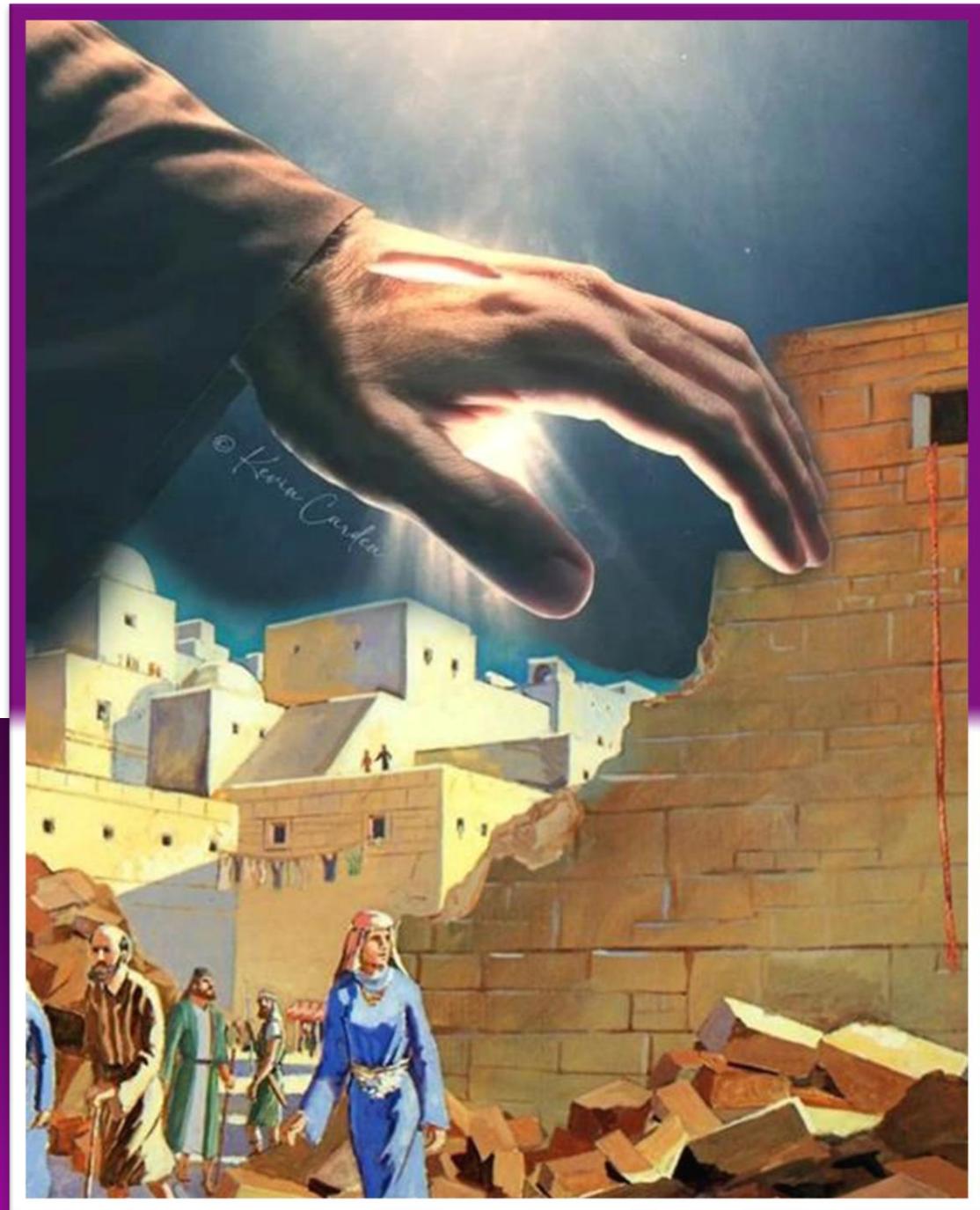


イスラエルの民がカナンに入る二度目の機会を与えられた時の経験と、主を否んだ後のペトロ（ペテロ）に与えられた恵みについて考えてみてください。

これらの出来事は、恵みを必要とする人たちにどのように恵みを与えるべきかについて、私たちに何を教えてくれるのでしょうか。

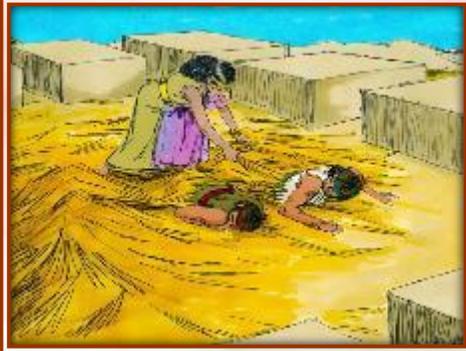
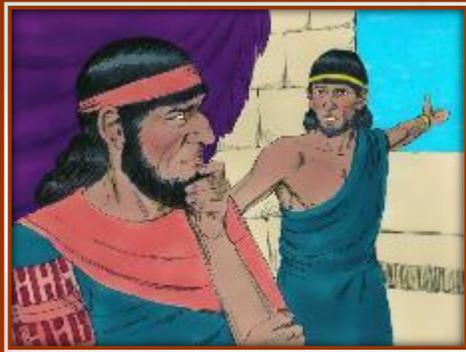
# ラハブへの恵み

(ヨシュア記2:2-21)



# 意外な場所の価値

信仰によって、娼婦ラハブは、様子を探りに来た者たちを穏やかに迎え入れたために、不従順な者たちと一緒に殺されなくて済みました。(ヘブライ人への手紙 11:31)



ラハブの信仰は何に基づいていましたか (ヨシュ 2:9-11) ?

ラハブが紅海の渡河など、誰もが知っていた出来事について語っていることに注目してください。しかし、他の人々がヘブライ人の神を恐れていたにもかかわらず、彼女は神の翼の下に避難することを選びました (ヨシュ 2:12-13)。

彼女が神を信じていたのなら、なぜスパイを助けるために嘘を使ったのでしょうか?

彼女のまだ未熟な信仰は、神の御心を完全に理解していたわけではありませんでした。彼女はスパイたちを助け、自分と家族の命を救うために最善を尽くしました。知識は後からついてくるものでした。

聖書は、彼女が下した決断、神の行動に対する彼女の理解、そしてその言葉に具体的な行動で従ったことを称賛しています (ヤコブ 2:25)。

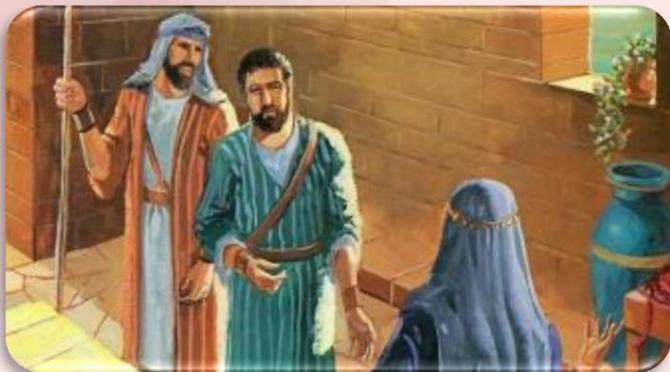
ラハブは、神に従ったエリコの住民なら誰でも経験したであろう出来事の一例です。

この物語は、神が私たちの究極の忠誠を  
いかに求めているかについて、  
何を教えてくれるのでしょうか。

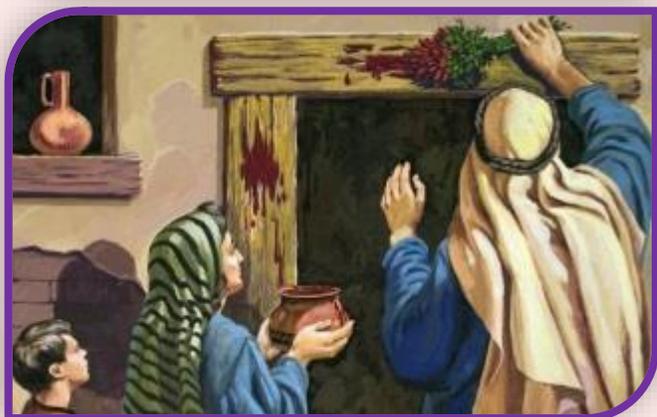
# 新たな忠誠

もし、だれかが戸口から外へ出たなら、血を流すことになっても、その責任はその人にある。我々には責任がない。だが、あなたと一緒に家の中にいる者に手をかけるなら、その血の責任は我々にある。(ヨシュア記 2:19)

ラハブの論理は明白でした。「私は親切に行動して（ヘセド）、あなたを救いました。今度は親切に行動して、私と私の親族を救ってください」（ヨシュ 2:12-13）。



彼女は気づいていなかったが、ラハブはイスラエルに対して、神ご自身がイスラエルに対してなされたように、すなわち、優しさ〔ヘセド〕をもって行動するよう求めていたのだ（申7:12）。



斥候たちは、エジプトで死を逃れるために自分たちが満たしたのと同じ条件をラハブにも満たすよう求めました。こうして、彼女は神とイスラエルとの契約に加わることになりました。

## 過越祭の イスラエル

鴨居と門には血を塗らなければならなかった。  
(出12:7)

家を出れば死ぬ  
(出12:13)

## エリコの ラハブ

彼は窓に赤い紐をつけなければならなかった  
(ヨシュ2:18)

家を出れば死ぬ  
(ヨシュ2:19)

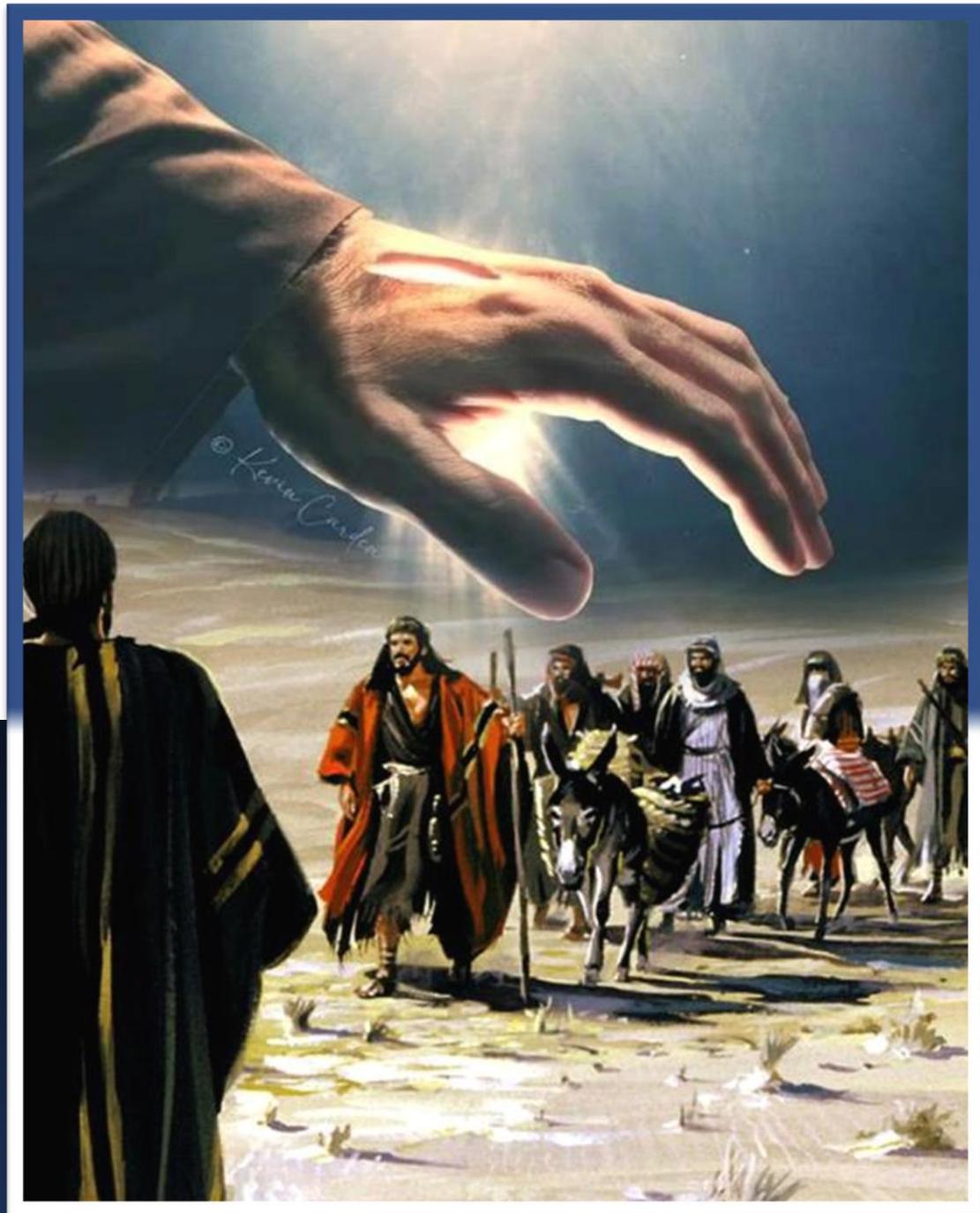


この二つの物語から、どんな力強い福音のメッセージを見いだせるでしょうか。

そこからどんな福音の教訓を得ることができるでしょうか。

# ギブオン人への 恵み

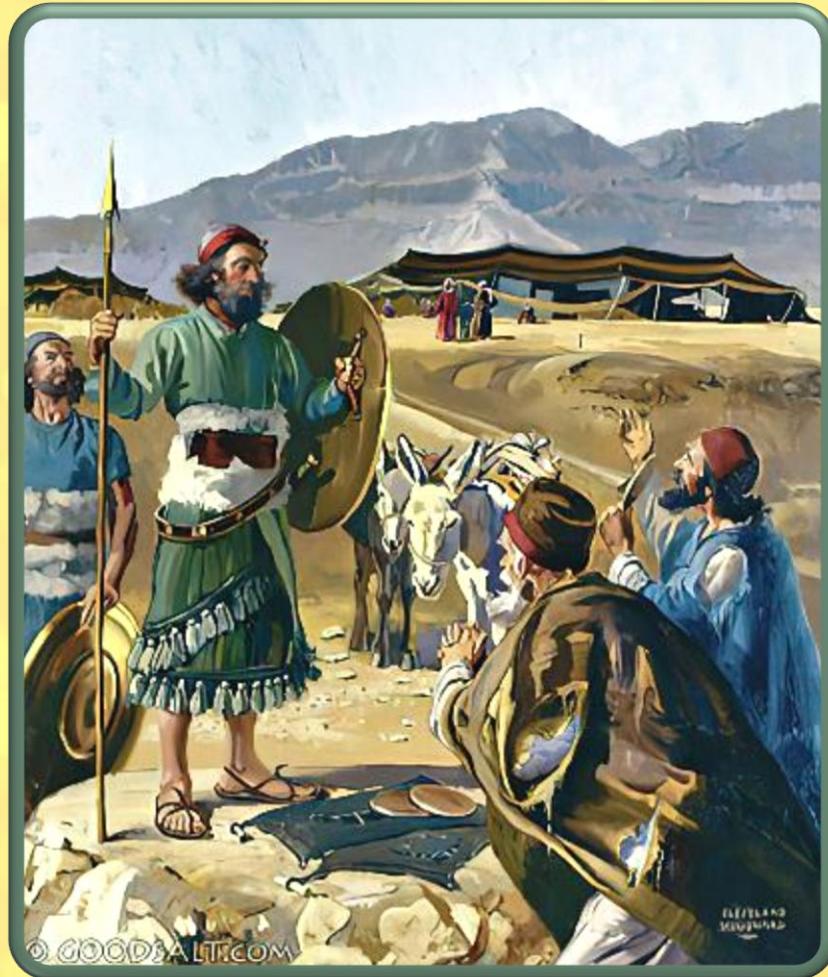
(ヨシュア記9章)



# 相反する価値

彼らはギルガルの陣営に来てヨシュアとイスラエル人に、「わたしたちは遠い国から参りました。どうか今、わたしたちと協定を結んでください」と言うと、(ヨシュア記 9:6)

ラハブとギブオン人の共通点と相違点に注目してください：



信仰の要素	ラハブ	ギブオン人
基礎	聞いていた(2:10)	聞いていた (9:3)
方法	嘘 (2:4-5)	嘘 (9:4)
ゴール	助かるために (2:13)	助かるために (9:24)
即効的結果	救出(6:23)	救出(9:26)
長期的な結果	完全な市民権を得た(6:25)	奴隷となった (9:27)

ラハブはスパイを解放するために自発的に嘘をついた。しかし、ギブオン人は意図的に嘘をつき、欺こうとし、狡猾さを用いた（創3:1a 参照）。さらに、イスラエルの指導者たちは神に相談しなかったことで失敗した（ヨシュ9:14）。

ギブオン人を滅ぼすか、誓いを尊重するか（ヨシュ9:18）。



あなたは、二つの相反するような  
聖書の価値観の間で、  
どれくらい葛藤したことがありますか。

# 驚くべき恵み

「・・・お前たちは今、呪われて、奴隷となり、お前たちの間からわが神の宮の柴刈り、水くみが断えることはないだろう。」(ヨシュア記 9:23)

ギブオン人の命を助けることは、神からの直接の命令に背くことになる(申7:1-2)。彼らに誓ったような誓いを破ることも罪とみなされた

(ヨシュ9:19、詩15:4b)。ジレンマはどのように解決されたのか？

彼らは命は助かったものの、呪いをかけられました

(ヨシュ9:20-23)。その呪いとは、代々神の民に仕えることであり、これによって彼らは神の民と密接な関係を築き、決して引き離されることはありませんでした(ネヘ7:6, 25)。

さらに、神の家のために水を運び、木こりをしていたため、彼らは常に神と接していました。神の恵みによって、呪いは祝福へと変わりました。

「わたしは悪者の死を喜ばない。むしろ、彼らがその道を離れて生きることを喜ぶ。」(エゼ 33:11)



## ヨシュア記9:21～27を読んでください。

指導者たちは続けた。「彼らを生かしておき、共同体全体のために柴刈りと水くみをさせよう。」彼らはこうして、指導者たちの告げたとおりになった。ヨシュアはギブオンの住民を呼び集めて、彼らに言った。「お前たちはなぜ、我々を欺いて、はるかな遠い国から来たと言ったのか。お前たちは我々のうちに住んでいるではないか。お前たちは今、呪われて、奴隷となり、お前たちの間からわが神の宮の柴刈り、水くみが断えることはないだろう。」彼らはヨシュアに答えた。「あなたの神、主がその僕モーセに、『この地方はすべてあなたたちに与える。土地の住民をすべて滅ぼせ』とお命じになったことが僕どもにはっきり伝わって来たので、あなたたちのゆえに命を失うのを非常に恐れ、このことをいたしました。御覧ください。わたしたちは今はあなたの手の中にあります。あなたが良いと見なし、正しいと見なされることをなさってください。」ヨシュアは彼らにそのようにし、イスラエルの人々の手から彼らを助け、殺すことを許さなかった。ヨシュアは、その日、彼らを共同体および主の祭壇のため、主の選ばれた所で柴刈りまた水くみとした。それは今日まで続いている。

ヨシュアの解決策は、正義と恵みを  
いかに組み合わせたものでしたか。

「イスラエルの子らは、神が彼らのために定められた地域を、ことごとく占有することになっていた。真の神への礼拝と奉仕を拒む諸民族は、立ちのかされるのであった。しかし、イスラエルが神のご品性をあらわすことによって、人々が神に引きつけられることが神のみ旨であった。全世界に、福音の招きが与えられなければならなかった犠牲制度の教えを通して、キリストは諸国民の前に掲げられ、それを見あげる者はすべて生きることができるのであった。カナン人ラハブやモアブ人ルツのように、偶像礼拝から真の神の礼拝へ立ち帰った者はみな、神の選民に加えられるのであった。イスラエルは人数が増えるにしたがってその境界をひろげ、彼らの国は全世界を包含するに至るはずであった。」